

## 「酋耳」考

森 博 行

### 序 文

中国における虎について調べていたとき、「酋耳」なる動物に出会った。虎に似た動物で、暴虎が出ると突然現われ、暴虎をかみ殺す、かみ殺すが食べたりはしない。いわば仁獣である。ところでこの「酋耳」という奇妙な名の由来は何なのであろうか。また、「酋耳」は本当に虎に似た動物だったのだろうか。私の興味はこの点にある。しかしながら、私は動物学者でないので、動物学的な観点から索詮することができない。そこで私は、私の学問の範囲で調査した結果を報告し、博雅の教えを請うことにした。

#### 一、『逸周書』「王会」篇と「酋耳」

唐代の説話に次のような話がある。

唐の天后（女帝・則天武后のこと、六九〇―七〇五在位）中、涪州の武龍の界に虎暴多し。一獸有り、虎に似て

絶だ大なり。(ある)日の正午、一虎を逐いて直ちに人家に入り、之れを噬み殺す。亦た食わず。是れに由り果  
界に復たは虎有らず。録して奏す。『瑞(応)図』(梁・孫柔之撰)を検するに、乃ち酋耳なり。生き物を食わ  
ず、虎暴有れば則ち之れを殺すなり。唐・張鷟『朝野僉載』(『太平広記』卷四百二十六「虎一」)

右の文に『瑞(応)図』という書物が出てくるが、<sup>(1)</sup>「酋耳」が中国の文献に最初に現われるのは、恐らく『逸周書』  
(卷七「王会」篇)。この書物は、晋の咸寧五年(二七九年)、魏の襄王(前三三四—三一九在位)の古冢から発掘  
された古書の一つとされてきたが、<sup>(2)</sup>王(虎)をははじめとして、『逸周書』と汲冢との結びつきを否定する学者が多い。<sup>(3)</sup>  
ここに「王会」篇を引用してみよう。<sup>(4)</sup>

央林は酋耳を以てす。酋耳なる者は、身は虎豹の若くして、尾は長さ其の身に參ばいす。虎豹を食う。

『逸周書』の注釈者・晋の孔晁によれば、「王会」篇は、成周(後の洛陽)が落成したとき、成王が「諸侯および  
四夷」を呼んで会合したときのことを記したものである。「央林」は、やはり孔晁によれば、「戎の西南に在る者」、  
つまり中国の西南に住んでいた異族、いわゆる西域諸國のひとつである。晋の郭璞が『山海經』(卷十二「海内北  
經」)の注釈に引用した『逸周書』では、

央林は、酋耳。酋耳は虎の若くして、尾は身より參ばいす。虎豹を食う

となつてゐる。

さて、「酋耳」なる動物は、西南に住んでいた民族によって中国にもたらされたというのであるが、「酋耳」のみ  
ならず、「茲白」「鬪」など、四方の異民族がこのとき貢納した獣たちは、『山海經』に負けないほど不思議な名前  
を持ったものばかりである。このような『逸周書』は、いつごろ、誰の手によって編纂されたのであろうか。清の朱  
右曾によれば、「未だ必果<sup>くだら</sup>ずしも文武周召の手に出せずと雖も、要するに亦た戦国秦漢人の能く偽託する所に非ず」、  
また至正甲午(十四年—西曆一三五四年)冬十二月四の日付のある黄玠の序文によれば、「蓋し戦國の世、逸民処士

の纂輯する所<sup>(6)</sup>」ということである。現代の学者、林泰輔氏や屈万里氏の見解では、それぞれ

王会解に至りては穢人・良夷・高夷等の名あり、孔晁注に穢人は韓夷、良夷は楽浪、高夷は高句麗とあり、(中略)周代の書たることは甚だ疑はし<sup>(7)</sup>。

殷祝・王会兩篇、更象是作於戰國末年<sup>(8)</sup>。

結局、作者も製作年代も、はっきりしたことはよく分からないが、遅くとも戦国末期には、完成していたということであろう。

ところで問題の「酋耳」なる動物は、果たして虎に似た動物であったのだろうか。私の見解を先に述べれば、「酋耳」なる動物は、本来、西方産の馬であった。この小論では、私はその理由を三つの点(1、耳、2、白色、3、虎豹を食う)から、順次述べていくことにする。

## 二、馬と耳の関係

これまで「酋耳」が虎に似た動物とされてきたのは、「酋耳」が虎を殺すような動物であるならば、中国でもっとも凶暴である虎に似た動物以外にはありえないという、いわば経験主義に依るものである<sup>(9)</sup>。特別に想像力の豊かな人間は別にして、普通、人間というものは、己れの経験や知識の範囲でしかものを考えることができない。だから「酋耳」を虎に似た動物と考えたとしても一向に不思議でない。しかし、この経験や知識ということをもっと自由に応用したならば、どうであろうか。

「酋耳」という動物名で、私が思い付いたのは「緑耳」という名の馬。『竹書紀年』(卷下)に

(穆王の)八年、北唐、來賓し、一鬪馬を獻す。是れ驟(緑)耳を生む。

この文の「北唐」は、中国の西北部にいた異民族の名。『逸周書』(卷七「王会」篇)に「北唐戎」という語があ

り、孔晁は「北唐戎は、西北に在る者なり」といった。また「緑耳」は『穆天子伝』（卷二）の八駿の一頭としてよく知られているが、郭璞は『穆天子』の「緑耳」に注釈を加えて、次のように言った。

魏の時、鮮卑、千里の馬を獻す。白色にして兩耳は黄なり。名づけて黄耳と曰う。即ち此の類なり。

既に引用した『竹書紀年』に「驟耳」と記されていたように、「緑」を馬偏の字に書くことがある。また「耳」を馬偏を付けて「馴」と書くこともある。しかし、『穆天子伝』のように「緑耳」と書くものがあることは重要である。つまり郭璞が言うとおりに、外国産の馬には、耳が黄色や緑色のものがいた、少なくとも初めて外国（恐らく西域）からもたらされた馬を見たとき、中国人の中には黄色の耳、また緑色の耳をしているように感じた人がいた。いや実際にそういう馬を見たわけではないが、あるいは真の馬ではなかったかもしれないが、中国種にあらざる馬あるいは馬に似て馬にあらざる動物を、「緑耳」とか「黄耳」とか「黄耳」とかいつて、中国種の馬と区別したのかもしれない。大事なのは耳である。こういう話が伝わっている。<sup>(10)</sup>


其の馬、驪馬・烏馬は、赤耳多し。黄馬・赤馬は、黒耳多し。唯だ耳の色のみ別なり。自余の毛色は、常の馬と異ならず。

「驪馬」は、『説文解字』（十上）によれば、赤色の馬で、黒色の鬣と尾を持った馬。その外の「烏馬」「黄馬」「赤馬」については、よく分からない。『説文解字』の記述を応用すれば、それぞれ鬣と尾が、烏色・黄色・赤色の馬でもあろうか。それはともかく、右の文で重要なのは、言うまでもなく、「赤耳」「黒耳」、つまり赤色の耳、黒色の耳をした馬がいるということである。緑、黄、赤、黒とくれば、白もあるのではないかと想像したくなるが、これは後回しにして、後世の作品であるが、杜甫（七二二—七七〇）の馬を詠じた「房兵曹の胡馬」詩（『分門集注杜工部詩』卷二十三）を引用しておこう。

竹批ぎて 双耳 峻なり

風入りて 四蹄 軽し

竹をそいだように切り立った耳、これこそ馬の姿を形容するにふさわしい。中国人にとって、馬と耳は切り離せないものであった。「僮耳」の耳についても、同じ考えを採用したのである。

この章の最後に、甲骨文の馬の字を一例、紹介しておこう。「」（『校正甲骨文編』卷一〇・一）。長い顔、たてがみ、尻尾の先、そして耳に、特長があることが分かる。

### 三、馬と白色の関係

次に「僮耳」の「僮」。「僮」字そのものを考える前に、「僮」字と動物との結びつきで思い浮かぶ言葉について言えば、「獐」である。『説文解字』（十上）に、「獐は、麋の属」、「獐は、大母猴也」とあるから、サル類であろう。ところで『爾雅』「積獸」を見ると、「獐は、鹿の如くにして、善く木に登る」とある。「鹿」が鹿偏の字であることを考えれば、鹿の類である。サルの類であり（木登りがうまい）、また鹿のような姿の動物とは、一体いかなる形状をした動物を想像すればいいのであろうか。清の郝懿行は『爾雅義疏』において、次のように解釈した。「説文に、獐は、麋の属。按ずるに獐は、母猴なり。此れは鹿の如しと言う。鹿は即ち大鹿なれば、猴と状を異にす。然らば則ち獐の獸為る、既に是れ猴の属にして、又た鹿の形に類す。鹿の形は麋に似て、而も足は狗の如し。故に獐は犬に从う」。郝懿行が「足は狗の如し」と補足したのは、『爾雅』に、「麋は、大鹿なり。鹿毛にして、狗足」とあるからである。サルの属で鹿の類、しかも犬の足を持った動物、人間が創造力にまかせて作り上げた奇妙な動物としか考えられない。しかし、これは私にとって、重要なヒントである。中国人は様々な動物を素材に、新しく動物を作り上げたと考えられるからである。

やはり「僮」字の意味を考える前に、さらに次の文を紹介しておこう。

膝の上皆白きは、惟鼻。四髀(膝下)皆な白きは、贈。四蹄(蹄)皆な白きは、首。前足皆な白きは、騃。後足皆な白きは、狗。前右足白きは、啓。(前)左(足)白きは、跨。後右足白きは、驥。(後)左(足)白きは、鼻。驪馬の白き腹は、驪。驪馬の白き跨は、驪。白き州(竅)は、驪。尾木の白きは、驥。尾の白きは、驥。駒。駒額は、白頭。白き達素(鼻梁)は、鼻。面頰(頰と頰)皆な白きは、惟駝。

これは、『爾雅』「積畜・馬屬」の一文であり、邢昺の『爾雅注疏』によれば、「馬の白色の在る所の異名を弁」じたものである。『爾雅』の中で、体のどの部分が白色であるかを、これほど多岐にわたって述べた動物は、馬だけである。耳に関して何も言及されていないのはまことに遺憾なことだが、まるで馬の特長は、白色であると言わんばかりである。馬の色の特色は、白色とわいていいてあろう。なお、牛の場合は、黒色。『爾雅』「積畜・牛屬」に、

黒き脣は、特。黒き背は、軸。黒き耳は、聚。黒き腹は、牧。黒き脚は、捲。

さて問題の「酋」字の意味である。『説文解字』(十四下)に  
酋、釋酒なり。

とある。清の段玉裁は「日久しい酒」と説明した<sup>(12)</sup>。ところで「酋」字にはまた、「西方なり、秋なり」の訓がある。漢の揚雄『太玄経』(巻九「太玄文」)。「太玄経」は『周易』に倣って作られたものであり、「太玄文」の章は、「罔(北・冬)・直(東・春)・蒙(南・夏)・酋(西・秋)・冥(北・冬)」の五文字で表わされる、万物の消長循環を説いたものである。揚雄はなぜ、本来「日久しい酒」であった「酋」を「西方なり、秋なり」と訓じたのであろうか。『周礼』(巻五「酒正」)に、「事酒」「昔酒」「清酒」の三種の酒が記述されている。このうちの「昔酒」が他ならぬ「酋」にあたる。後漢の鄭玄は次のように言った。「昔酒は、今の酋久白酒なり」。つまり周代の「昔酒」と呼ばれた酒は、漢代の「酋久白酒」だといっているのである。鄭玄の注釈から、われわれは次のことが言える。「酋」字から白色が連想される、と。戦国時代の鬲衍が唱え始めたという五行説によると、西方・秋は、色に当ては

めれば白色。揚雄は「僮久白酒」から逆に類推したのではあるまいか。<sup>(13)</sup> なお、揚雄『方言』（卷七）に「（河自り以北、趙魏の間）久熟を僮と曰う」とある。

手近な辞書には、「僮」字に白という訓はないようだが、「僮耳」はすなわち「白耳」（白色の耳をした馬）と考えるのである。なぜ「白耳」といわなかったのか。「僮」から私が先ず連想する言葉は僮長<sup>(14)</sup>。言うまでもなく、異民族の責任者に対する呼称である。西方からやって来た、虎を食う動物の名として、字面からして「僮耳」はいかにもふさわしい。ちなみに「緑耳」や「黄耳」が虎を食うという話は聞いたことがない。「白耳」では迫力がないのである。

「僮耳」はすなわち「白耳」ということについて、なおひとつ補足しておく。よく知られているように、古来中国では、白色の動物は天下泰平の奇瑞を示す生き物として珍重されてきた。孔子がいった「青政は虎よりも猛きなり」（『礼記』）という言葉に示されるとおり、虎は中国では、厄介な動物であった。その虎をやっつける「僮耳」が「白耳」であることは、やはり意味のあることなのである。陰湿な密告政治を行なった則天武后は、女帝ということもあるのだから、評判の芳しくない皇帝である。第一章冒頭に紹介した則天武后時代の話は、あるいは作物的なものであるかもしれない。

#### 四、馬は虎豹を食うという説（前）

「僮耳」は暴虎を退治してくれる不思議な動物である。中国における不思議な動物といえ、先ず『山海経』に指を屈しなければならぬ。この『山海経』に虎や豹を食うというすごい動物が出てくる。

（中曲の山に）獸有り、其の状は馬の如くにして白身、黒尾、一角、虎の牙爪、音（声）は鼓の音の如し、其名を駮と曰い、是れ虎豹を食う。

（卷二「西山経」）

(北海内に) 獸有り、其の名を駮と曰い、状は馬の如く、鋸牙、虎豹を食う。

(巻八「海外北経」)

右のふたつの文ともに、「駮」は「状は馬の如く」とあり、また馬偏の文字であることから判断して、「駮」が馬と関係ある動物である、と考えられていたとして差し支えないであろう。『爾雅』には「積畜」の「馬属」に収録されている。「音(声)は鼓の音の如し」という記述は、あるいは馬のいななきからの連想かもしれない。またこの「駮」と関係があるのかないのか、私には判断できないが、ヨーロッパの一角獣・ユニコーンは、馬の身体をしている。馬のような動物が虎を食うなどは、われわれの感覚には馴染まないが、古代の中国人はそう考えたのである。しかも『山海経』において、数ある動物の中で虎や豹を食うのは、この「駮」だけである。

既に述べたとおり、『逸周書』「王会」篇は、周王と「諸侯および四夷」との会合を述べたものであり、このとき四夷は、各々その国の特産の動物を献納したとされる。先に引用した本文に

央林は酋耳を以ってす。酋耳なる者は、身は虎豹の若くして、尾は長さ其の身に参ばいす。虎豹を食う。とあった。この文の前に、次のような一文がある。

義渠は茲白を以ってす。茲白なる者は、白馬の若くして、鋸牙、虎豹を食う。

この「茲白」について、孔晁は注釈において、「一名、駮なる者なり」といった。これが先程の『山海経』の記述を踏まえてのことであることは、至って明瞭である。ここで大事なことは、「酋耳」も「茲白」も、ともに「虎豹を食う」という点である。どちらも「虎豹を食う」動物であるのに、前者は「身は虎豹の若く」であり、後者は「白馬の若く」であるという。これはいかなることなのであろうか。私は、「酋耳」と「茲白」は実は同じ実態の動物である、と推測する。章を改めて述べていくことにしよう。



五、馬は虎豹を食うという説(中)

これから述べることは、私の単なる推測であるが、右に引用した「王会」篇の本文である「齧耳なる者は、身は虎豹の若くして、尾は長さ其の身に參ばいす。虎豹を食う」、「茲白なる者は、白馬の若くして、鯨牙、虎豹を食う」は、その他のこれと似た形式の文すべてを含めて、実は孔晁より以前の学者が書いた注釈の文だったのであるまいか。少し煩わしいが、ここに「王会」篇の一部を引用してみよう。

稷慎、大摩。

穢人、前兎。前兎若獼猴、立行、声似小兎。

良夷、在子。在子幣身人首、脂其腹、炙之菴、則鳴曰在子。

揚州、禹禹。魚名。

解、諭冠。

兂人、麋。麋者、若鹿、迅走。

兂人、雖馬。

背丘、狐九尾。

周頭、輝祗。輝祗者、羊也。

黑齒、白鹿・白馬。

白民、乘黃。乘黃者、似狐、其背有兩角。

東越、海盒。

歐人、蟬蛇。蟬蛇、順食之美。

於越、納。

姊妹、珍。

具区、文璧。

共人、玄貝。

海陽、大蟹。

自深、桂。

会稽以蠶。

(中略)

義渠以茲白。茲白者、若白馬、鋸牙、食虎豹。

央林以筒耳。筒耳者、身若虎豹、尾長參其身。食虎豹。

北唐以閭。閭似踰冠。

渠叟以鬪犬。鬪犬者、露犬也。能飛食虎豹。

棲煩以星施。星施者、珥鹿。

卜盧以紈牛。紈牛者、牛之小者也。

区陽以鼈封。鼈封者、若蟻、前後有首。

ある場合は、ただ「四夷の名+献納物」あるいは「四夷の名+以+献納物」という形式であり、またある場合は、更に「……(者)……(也)」という形式が加えられており、全体の整合性という点からいって、バランスが悪い。作者の気まぐれである、といってしまうばそれまでだが、私は次のように考える。<sup>(15)</sup>つまり「王会」篇の本文は、もと

四夷の名十獻納物

あるいは

四夷の名十以十獻納物

という形式、例えば、

兪人雖馬

青丘狐九尾

央林以匱耳

義渠以茲白

の積み重ね形式であった。ところがいつの間にか、「……者……也」という形式の注釈の文が紛れ込んだ、と考えるのである。<sup>(16)</sup>それに『逸周書』には、「謚法」篇を除いて、原則として「……也」という表現はなく、「……者……也」という形式の文体は、本文とは別の注釈の文体としたほうが、やはりいいのではあるまいか。

#### 六、馬は虎豹を食うという説（後）

それでは、『逸周書』「王会」篇の原注釈者は、何を参考にして注釈を書いたか。これまで何度か引用した『山海経』に記されているような、不思議な動物を載せた文献の類あるいは図像や動物の形をした容器などであると考える。陳逢衡は『逸周書補注』（巻十七）において、「昔の王会を評する者、以って考工記に似たり、山海経に似たりと為す、信なり」と言った。図像や容器については、私の専門領域外なので、今回は『山海経』を参考にして考えてみたい。

袁珂氏によれば、『山海経』の「五藏山経」（「西山経」を含む最初の五卷）および「海外経」の部分は戦国時代

中期に、「海内経」の部分は漢代の初期に成立したということであるが、試みに先ず、「王会」篇の「茲白」に関する文と、『山海経』の「駮」に関する文を対照してみると、次のとおりである。

茲白なる者は、白馬の若くして、鯀牙、虎豹を食う。(「王会」篇)

(「駮」なる者は、) 状は馬の如く、鯀牙、虎豹を食う。(「海外北経」)

「茲白」と「駮」、まったく同じ動物と考えてかまわないであろう。次に、「胄耳」。「山海経」は、卷十二「海内北経」に出てくる「騶吾(虞)」。

央林は胄耳を以てす。胄耳なる者は、身は虎豹の若くして、尾は長さ其の身に参ばいす。虎豹を食う。(「王会」篇)

林氏国に珍獸有り。大ききは虎の若く、五彩畢く具わり、尾は身より長し。名づけて騶吾(虞)と曰う。(「海内北経」)

先ほどの「茲白」と「駮」とのようにはいかないが、「央林」と「林氏国」、「王会」篇の記述は、『山海経』に記録されているような伝説に基づいたものとしてよいのではないか。

「茲白」や「胄耳」という奇妙な名前を持った動物の説明文は、「王会」篇の原注釈者の文である。もし私の推測が正しいとすれば、「胄耳なる者は、身は虎豹の若くして」以下の文は、『山海経』のような資料を参考にした、原注釈者の個人的見解であって、「胄耳」が虎であるという根拠はなくなってしまう。『山海経』の本文には、「騶吾(虞)」と記されていて、「胄耳」とは記されていないから。更に推測すれば、「胄耳」が虎のような動物とされたのは、既に「茲白」が白馬のような動物とされており、それと重複するのを嫌ったためではあるまいか。しかし、同一の動物が連続する例がないわけではない。「西申以鳳鳥、氏羌以鸞鳥」。「鸞鳥」は「鳳鳥」の一種である。この例から考えて、馬族の動物が続いたとしてもかまわない。

『山海經』による限り、虎を食う動物は、「駮」しかない。しかも、『逸周書』中の「茲白」は、「一名、駮なる者なり」であった。「僮耳」は馬のような動物と判断することは、「僮耳」が虎であると推測することと、同程度に妄言ではない。「僮耳」と「茲白」が同じ実態の動物であると私が推測するのは、以上に述べた理由による。

なお補足すれば、私のいわゆる原注釈者が、「僮耳」を虎に似た動物としたのは、同じ場面に同等の比重をもって、虎と馬が描かれる図像や文学作品があるためかもしれない。詳細は、曾布川寛『崑崙山への昇仙―古代中国人が描いた死後の世界』三七頁―四二頁（中公新書 昭和五十六年）を参照。

#### 七、馬は虎豹を食うという説の真相

ところで実際問題として、馬が虎を食うということは、動物学から言って先ずありえない。もし虎を食う馬が現われたならば、それは馬ではなく、新しい品種としなければならぬ。なぜなら、馬は草食動物であるから。この事情は、中国においても変わらないことは言うまでもない。甲骨文に次のようなものがある。

貞う、我が馬に虎有りて、侏れ田あらんか。貞う、我が馬に虎有りて、侏れ(田あら)ざるか。<sup>(18)</sup>

この卜辞は、虎が馬を襲って、傷つけるかどうかを占ったものである。襲うのは虎であって、馬ではない。馬が虎を食う、あるいは虎をやっつける、これは一体どのように解釈すればいいのであろうか。人間が何かイメージを作り上げる時、普通は現実的な根拠があるものである。虎を食う馬も、恐らく例外でない。馬が虎を食うという発想は、どのような事実からの連想なのであろうか。

これまでの通説では、中国人が初めて「騎射」したのは、趙の武靈王（前三二五―前二九九在位）ということになっている（『戦国策』巻十九「趙策二」）。しかし、甲骨学の研究成果によれば、殷人が既に、単騎（乗馬）、馬射（騎射）ということを行なっていたという。つまり馬に乗って狩猟することが行なわれていたとされるのである。<sup>(20)</sup> た

だし、注20に記しておいたように、右の見解は、まだ検討を要する余地がある。後世の文献であるが、騎射に關してはつきりしているものを、ここに紹介しておこう。有名な逸話である。

李將軍広は、軍に従いて胡を撃つ。善く騎射し、殺首・禽の多きを用つて、漠の申郎と爲る。(中略)広、出でて狐せしとき、草中の石を見、以つて虎と爲して之れを射れば、石に中りて鏃を没す。之れを視れば石なり。


これは、『史記』(卷一百九「李將軍列伝」)の一節。当時、生け捕りの場合は別にして、虎は「騎射」することがあったことがわかる。孔子が「暴虎馮河」(『論語』「述而」)といつて、素手で虎と戦うことの無謀を戒めたのも理由のあることなのだ。

甲骨文には馬に乗つて虎狩りをしたという、はつきりとした記述はないようだが、虎狩りをしていたことは間違いない。甲骨文に「隻(獲)虎」、「皐虎」という語がある。「皐」字は、陳夢家氏によれば、「卜辞の皐字は応に係論議の説(『契文萃例』下41)に依り、積して禽字と爲すべし、乃ち是れ動詞の擒なり。皐は捕鳥の網に象るなり」。更にまた甲骨文には、「射𧇧」という語があり、やはり陳夢家氏によれば、「𧇧」字は『說文解字』の「𧇧」字と同じで、「白虎」のことである。甲骨文を紹介しておこう。

王、其れ𧇧と兕とを射て擒えて災い無からん。大吉。<sup>(23)</sup>

殷人は「騎射」して狩りをしていたとされること、あるいは李將軍広の故事などから考えて、馬に乗つて「𧇧」(白虎)を射たこともあつたかもしれない。<sup>(21)</sup>また中国人が初めて「騎射」したのが、通説通り、趙の武靈王だとしても、漢民族も北方の遊牧民・胡人が騎射している姿を目にはしていたであろう。武靈王は「胡服して騎射す」(『戰國策』)といつた。

既に引用したとおり、「駮」という動物は、「其の状は馬の如くにして白身、黒尾、一角」であり、西方の異民族・義渠がもたらしたものであつた。推測に推測を重ねることになるが、この一角は馬上で放たれる一本の矢からの連

想であったのではないか。「魯耳」と一角獣「駁」（「茲白」）が類似の動物であるという確証は、結局の所ないのだが、虎を退治する馬のような動物「魯耳」、その淵源を尋ねれば、「騎射」による虎退治なのではあるまいか。なお、半人半馬のケンタウロスが弓の名手であること、射字は甲骨文では「」と表わされることを付け加えておく。

## 結 語

本来「魯耳」なる生き物は、虎のような動物ではなく、馬のような動物であった、というのが私の見解であり、三点（1、耳、2、白色、3、虎豹を食う）にわたって述べた。東西文化交流が生み出した思わぬ産物である。

「王会」篇について、陳逢衡は「是の篇、凡そ七たび稿を易えしも、其の考え無き者、猶ほ磊磊たり。甚しきかな、古書の読み難きは」と詠嘆した（『逸周書補注』「叙略」）。陳氏の心血を注いだ作物を前にして、私はただ拱手しているばかりで、一步も進むことはできないが、あえてこの拙論を書くに至ったのは、高名な甲骨文学者・董作賓氏の『獲白麟解』<sup>(26)</sup>に啓発されるところがあったからである。ただし、私の見解は、董氏の名論文と違い、すべて憶測の域をでない。ここに縁起を記して、博雅の御教示を待つことにする。

## （注釈）

（1）清・馬国翰によれば、『瑞応図』は孫亮が作った瑠璃屏風に描かれた絵図百二十種（『董豹』古今注』卷下「雜注」第七）の縁起であるという。『瑞応図』解題（『玉函山房輯佚書（五）』二八三五頁上段 文海出版社）。

（2）『晉書』卷三「武帝紀」。ただし、『晉書』第五十一「東晉伝」には、太康二年（二八一年）に発掘されたとし、古冢は「或は安祿王（在位前二七六―前二四三）の家と云う」とある。

また、『隋書』卷三十三「経籍二」に、「周書十卷 汲冢書、似仲尼刪書之余」とある。

- (3) 宋粹序『經義考』(卷七十五「書四・周書」)を参照。
- (4) 引用のテキストは、序文に道光二十有六年(一八四六年)丙午夏六月既望の日付のある朱右曾撰『逸周書集訓校釈』(『皇清經解統編』所収)。
- (5) 『逸周書集訓校釈』序文。
- (6) 『四部叢刊初編』所収。
- (7) 『逸周書考』(『支那上代之研究』所収 光風館書店 昭和二年)。
- (8) 『厘万里先生全集』④ 先秦文史資料考辨三九八頁(聯經出版公司 中華民國七十二年二月)。
- (9) 虎が中国でもっとも凶暴な動物であることについては、「苛政は虎よりも猛きなり」といった孔子の言葉を想起すれば十分であろう。『札記』「檀弓下篇」。
- (10) 虎の異名に「李耳」という呼び名がある。この「李耳」の「耳」は、恐らく聴覚器官の耳とは関係ない。付録の形でこの小論の末尾に「李耳」考と題して、私の考えを記しておいた。
- (11) 清・王先謙『漢書補注』(卷九十六上「西域伝上」「大宛国」)に引く『隋西域図記』。
- (12) 「酋」が酒に係わる語であることは、ある点で意味深い。われわれ日本人は、酔っ払いを称して「虎になった」というが、『同語』(卷十六「鄭語」)に、次のような一文がある。
- 毒の酋腊なる者は、其の殺たるや滋ます速かなり。
- 韋昭によれば、「酋」は「精孰」、「腊」は「極」の意味。「酋耳」は虎をかみ殺す動物である。悪くすれば毒になりかねない酒の持つエネルギーを備えていると考えて、「酋耳」と命名されたのかもしれない。
- また晚清の魏自珍は、『十月廿夜、大風不寐、起而書懷』詩(『定盦文集補』「古今体詩上卷」)において、次のように詠じた。「西山風伯驕不仁、虺如醉虎馳如輪」。大風のすさまじい有様を「虺」として吠える「醉虎」にたとえたのである。これはどすさまじいものがあるまい。
- (13) 「酋」が「秋」の義であることについて、清の王念孫は発音の類似から説明して次のように述べた。『廣雅疏証』(卷三上「釈詁」)。
- 「月令」(孟夏)に、麥秋至る、と。「太平御覽」(卷三十一「夏上」)に、麥熟「月令章句」を引いて云わく、百穀、各おのその初めて生ずるを以て春と為し、熟するを以て秋と為す、故に麥は孟夏を以て秋と為す、と。「說文」



(七上)に、秋、穀孰するなり、と。秋と魯、亦た声近く義同し。

また、これまで「魯耳」が虎と考えられてきたのは、本文に述べたことと関連するかも知れない。虎は四神の一つであり、季節に当てはめれば秋、方位では西。更に言えば、『太玄経』巻九「太玄文」の「風而識虎、雲而識龍」という表現も、無縁でないかもしれない。なお、『逸周書』に五行説が見られることについては、林泰輔『周書考』に指摘されている。

(14) 「魯」字から「魯長」の語を連想するのは、私だけでない。許慎は『淮南子』(巻五「時則訓」)の「乃命大魯」に対して、「魯の説、魯豪の魯」と注釈を加えた。「魯豪」とは、「西戎無君、名強大有政者爲魯豪」。『尚書正義』(「麻蕡篇」)に引く鄭玄の説。また黄帝と涿鹿で戦って殺された蚩尤は、赤魯の古文という説があるという。周作人「南北」(『周作人散文第一集』所収 九五頁 中国広播電視出版社 一九九二年四月)。

(15) 林泰輔博士が、『逸周書考』において、既に本文の一部引用したが、次のように言われた。「王会解に至りては職人・良夷・高夷等の名あり、孔晁注に職人は韓穢、良夷は樂浪、高夷は高句驪なりとあり、其末に附録せし伊尹朝献(この四字朱右曾の説に従ひ商書の篇目となす)には莎車・月氏等の西域の名あり、その商書に非ざることは論なく、王会と同じく右の諸夷の名称に就て見れば、周代の書たることは甚だ疑はしい」。『逸周書』が一時に完成したものでないことは、他の資料からも考えられ、後世の増補がかなりあるらしい。私の推測は、単なる空想ではない。

(16) 注の文が本文に紛れ込んだと思われる明らかな例がある。「大夏茲白牛。茲白牛野獸也、牛形而象齒」の一文に関して、盧文昭は、次のように言った。「旧本正文、止大夏茲白牛五字、下十一字誤人注中、惠棟洪本增入正文。与初学記正同。今從之。衡案、茲白牛野獸也六字、当衍。不然則孔注用復述耶」。陳述衡は、「茲白牛野獸也」六字のみ、衍字としているが、私は盧文昭のいう「旧本」(元・劉廷幹本、四部叢刊初編所収)こそ本来の姿であったと考えるのである。また陳氏は「揚州禹禺魚名解隄冠」の文に対し、「或曰魚名解隄冠(冠)五字疑衍」と注引している。私はこれを徹底させたいのである。

(17) 『中國神話史』一七頁(上海文芸出版社 一九八八年第一版)。

(18) 『甲骨文集』二一一。

(19) 温少峰・袁庭棟著『殷墟卜辞研究——科学技术篇』第五章 畜牧 三四二頁(四川省社会科学院出版社 一九八三・十二成都) 参照。

(20) 温少峰・袁庭棟著『前掲書』第六章 交通与 馭伝 「四 騎乘」。なお、殷人が騎馬していたとされるのは、「乙卯卜、貞、子木」(『甲骨文集』二二八四・二二八八・二二八九)の「」を人が騎馬している象形文字(「人」字と「馬」

との合成文字」とし、更にこれを「奇」字に隸定し、「奇」字を「騎」字の初文と考えるからである。しかし、素人目にも右の推定は無理ではないかと思われる。なぜなら甲骨文の用例から見ても、「𠂔」が「人」(人)と「馬」(馬)字との合成とは考えにくいからである。

ただし、岡村秀典氏によれば、「これまで一般に馬車から騎馬への変化が考えられていたが、コーカサス平原では馬車の出現に先立つ前四〇〇〇年ごろにすでに騎馬の証拠がある」という研究が最近あらわれた」ということである。『馬車から騎馬へ』月刊 しにか 一九九三年五月号所収。

(21) 『殷墟卜辭綜述』五五四頁(中華書局 一九八八年一月第一版)。

(22) 『前掲書』五五五頁。

(23) 『甲骨文合集』二八四〇二。

(24) 虎は、いつも「騎射」されたのではない。『戦国策』(巻四「秦策二」)に次のような記述がある。

「刺」と表現されている以上、これは、短力か槍などで虎を突き刺すことである。また、一頭の虎を狭んで、ふたりの人物が素手で戦っている漢代の画像石が発見されている。『南陽市新発現的漢画像石』(一九九三年四月十一日付『光明日報』)。

孔子の批判には、現実的な根拠があったのかもしれない。

(25) 王忠麟が引用する『博物志』に、「菴白、状如鼯耳。長參其身、食虎豹」とある。しかし、陳逢衡によれば、「博物志所云、蓋以下文央林鼯耳混入誤矣」。陳逢衡『逸周書補注』(巻十七)。しかし、これは私と同じ考えをもっていた人が、あるいはいたという証拠かも知れない。

(26) 『董作賓甲骨論著上』(世界書局)所収。

#### 付録「李耳」考

漢の揚雄(前五三—一八)の『方言』(巻七)に、虎の異名として「李耳」という呼び方のあることが記されている。この「李耳」という名の由来について、晋の郭璞(二七六—三三四)は、次のように解釈した。『方言注』。

虎、物を食い耳に値えば即ち止む、其の諱に触るるを以ての故なり。

虎にとって耳は諱、すなわちタブーというのである。郭璞がこのような解釈を下したのは、恐らく音韻の関係からである。つま

り、「李」と「止」はともに「上声止韻」。『広韻』(卷三)。日本の一般の読者に容易に理解していただくために、日本語の音読を使って言い直す、「李」は $l$ 、「止」は $s$ 、韻母(母音)がともに $i$ 。つまり「李耳」即ち「止耳」(耳のところではめる)というわけである。こういう解釈法は、音韻学ではよく行なわれている。

しかし、虎にとって、なぜ耳がタブーなのだろうか。虎と感覚器官の関係を言えば、「虎視眈々」(『周易』「頤」)という言葉葉があるように、耳よりむしろ目である。虎は猫科の動物であり、夜行性である。だから目は重要な器官であり、それをタブーとするというのであれば理解できないこともない。ただし、虎にこのようなタブーがあるのかどうかは、動物学に門外漢の私には分からない。

揚雄や郭璞よりずっと後世の人であるが、北宋の王安石(一〇二一—一〇八六)は、虎の絵を詠じた作品「虎図」(『臨川先生文集』卷五)と題する詩の冒頭において、次のように歌った。

壮なる哉 𧆏(熊の一種)に非らず 𧆏(山猫の一種)に非らず

目光 夾鏡(二つの鏡)のごとく 坐隅に当たる

鏡のようなギラリとしたふたつの目、これこそ虎の威容を形容するのにもっともふさわしい。もっとも、『西遊記』(第三十回)において、怪物の妖術によって虎にされた三蔵法師の姿を形容して、「鋸牙包口、尖耳連眉」とある。しかし、この文の前に「白額圓頭、花身電目」とあることを忘れてはいけない。郭璞の説は成立し難いように思われる。<sup>補</sup>

それでは「李耳」とは何であろうか。明の李時珍(一五一八—一五九三)が次のように言った。『本草綱目』(卷五十一「獸之二、虎」)。

李耳は当に狸兒に作るべし。蓋し方音、狸を転じて李と為し、兒を耳と為すなり。今南人、猶お虎を呼んで猫と為すがごときは、即ち此の意なり。

李時珍は「李耳」を「狸兒」(りじ)と考えた。「狸」は猫の一種であり、「兒」は詞尾(接尾語)である。

しかし、この李時珍の説も、現在の中国言語学の研究成果からいって、成立し難い。詞尾(接尾語)に関して、現代中国の学者・唐蘭氏が、『中国文字学』(三〇頁 上海書店 一九九一年)ただし元著書は、開明書店 中華民國三十八年)の中で次のように言われた。

古書においては、ただ「睪子」、六朝時には「日子」があるのみで、「頭」・「兒」は、唐以後になって初めて現われた。

また王力氏は、『漢語史稿 中冊』(二二八頁 中華書局 一九八〇年)において、具体例を挙げられた。鳥獸類に関しては、

唐代の王維の詩が一番先に載せられている。

しからは、「李耳」の由来は何であろうか。私は次のように考える。ある地方では虎に似た動物、例えば李時珍がいう「狸」とかあるいは「貔」(ひ)などの動物も虎の一種と見なしていた。『広雅』(卷十下「積獸」)に「貔・狸(狸)、貓(猫の本字)なり」。虎が猫科の動物であることは既に言った。

次に想起すべきは、やはり『方言』に記述されている虎の異名「於菟」。なぜ「於菟」と呼ばれたか。「於菟」の「於」「菟」、ともに、韻母(母音)は。虎も音読すれば、韻母(母音)は。清朝の考証学者たち、例えば劉宝楠(一七九一—一八五五)が、『論語正義』卷六「公冶長」において、

「於菟は虎爲り。此れ反切の権輿(芳生え)なり。

といい、また王引之(一七六六—一八三四)が、『春秋名字解詁下』(『経義述聞』第二十三所収)において、

案ずるに於菟は、虎文の貌。説文に隄は黄牛にして虎文、隄は涂の若し、と。菟と隄は声義並びに同じ。虎に文有る、之れを於菟と謂う、故に牛に虎文有る、之れを隄と謂う。(中略)之れを單言すれば、之れを虎と謂い、之れを重言すれば、之れを於菟と謂う。

などと言ったように、「於菟」は「虎」を引き伸ばした表現である可能性がある。同じことが「李耳」についても言えるのではないか。「李耳」兩字とも韻母(母音)はi、それに対して、「貔」にしても「狸」にしても韻母(母音)はやはりi。

ただし、これで問題がすべて解決し尽くされたわけではない。なぜ「李耳」という文字で表わされたのか。それは残念ながら「於菟」がなぜこのような文字で表わされたのか分からないのと同様、現在の私には、全く見当がつかない。いずれ改めて考えることにしたい。

#### 補

魏譯は『方言箋疏』(卷八)において、『山海經』「海内北經」の一文「窮奇状如虎、有翼、食人従首始」、「一曰従足」を用いた後、次のようにいった。「拠此則虎之食物、亦自有一定。値耳即止、理或有之、其性使然、非由触諱也」。

(一九九三年九月十日記)